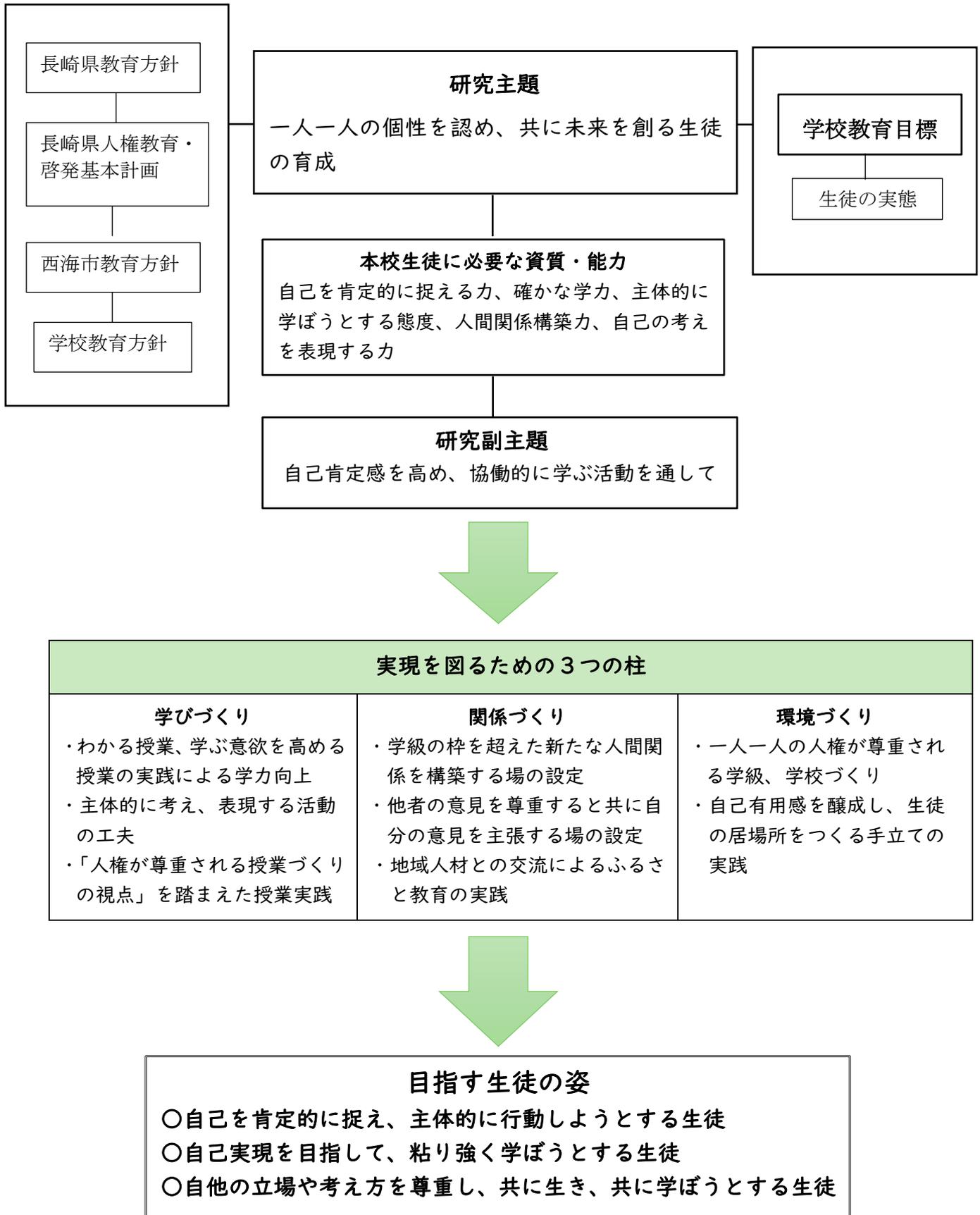


I 研究の構想



II 研究の実際

I 学びづくり班の実践

(1) 人権教育の視点に立った授業研究・指導案の作成

本校では、共通の指導案の形式を用い、「人権教育を通じて育てたい資質・能力」や「人権が尊重される授業づくりの視点」、その視点における「教師の手立て」を明確に示すことで、効果的に指導を行うことができることを目指した。各教科等で校内研究授業を行い、相互に参観することで、人権教育の視点に沿った授業がなされているか検討した。さらに、研究授業終了後に生徒との交流時間を設け、授業の中で分かったことや感想等を聞き取り、今後の授業改善に生かした。

<実践例> I年生保健体育「E 球技」イ：ネット型（バレーボール）の指導案の一部

<p>I-3 人権教育を通じて育てたい資質・能力 互いの相違を認め、受容できるための諸技能（技能的側面）</p> <p>IV-4 人権が尊重される授業づくりの視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 生徒の実態に応じた教材の提供（A-1③） ○ 自分と異なる考えや意見を感情的に拒絶せず、理解する技能の育成（B-1②） <p>5 展開</p>	
過程	教師の手立て・評価
展開	<p>5 特別ルールを2つ選ぶ。 ・個人で選ぶ。 ・グループで選ぶ。</p> <p>〈特別ルール〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・返球までに1回の1バウンドOK ・5回以内での返球OK ・サービスはアタックラインからOK ・オーバーハンドのキャッチはOK ・ボールの選択
	<p>5・各自で根拠をもって自分自身が考えるルールを選択させる。 ・グループで、特別ルールを決定する。 ・メンバー全員が納得して決定することを意識させる。</p> <p>【視点 A-1③】：特別ルールをホワイトボードへ提示し、選択肢を視覚化する。</p> <p>【視点 B-1②】：特別ルールを決定する際の自分の考えとその理由を伝える方法と、聞き方のルールを事前に確認する。決定する際は、「全員が楽しめる」をキーワードに決定する。</p> <p>【評価】：思判②<学習カード></p>

(2) 多様な考えを認め、協働的な学びを進めるために、対話活動に重点を置いた授業の在り方、学習形態の工夫

本年度は、授業における対話活動に更に重点を置き、対話活動をどのように仕組むかを考え、授業の中で対話活動をできるだけ仕組んでいくように取り組んできた。対話活動を行うことによって、自分とは異なる他者の異なるものの見方や考え方に触れることができる。また、視野が広がり、自分だけでは考えつかなかった新たな発想や解決策を生み出すことができると考えた。自分とは異なる他者の考えを認めることで、相手を理解し良好な関係性を創り出すことにつながった。

<実践例> I年：数学科「n個の正方形をマッチ棒で作るときマッチ棒は何本必要になるか、数式をたてて求める」

【この授業における人権が尊重される授業づくりの視点】

- 自由な発想、方法を認め、自己選択ができる場の工夫（A-2②）
- 協働の場を設け、自他の考え方や方法のよさに気付く（A-2④）

この授業では、まずどのような数式が立てられるか、自分が思いつく限りの数式をワークシートに書き示した。次に、班の中で、順番に自分の考えを説明し、考えを共有した。対話活動を主体的かつ有効に進めるために、付箋や構成シートを用いて互いの考えの共通点や相違点を見出し、質疑応答を繰り返しながら学びを深めた。

対話活動を通して、生徒一人一人が自分の考えを発表し、「できた」「わかった」を実感するとともに、級友の理解を得たことで自信をもって活動に取り組む様子が見られ、対話活動で学ぶことのよさを実感していた。対話活動の仕組み方、学習形態、手立ての有効性等は、校内授業研究会や校内研修会で検討し、事後の授業に生かした。



2 関係づくり班の実践

総合的な学習の時間「トライタイム」や学校行事において、異学年集団での学習や地域や企業と連携した活動を設定した。また、令和7年度から併設された時和特別支援学校西彼杵分校の児童生徒と合同で学校行事を行い、交流を深めた。

(1) ねらい

学年の枠を超えた学習集団を形成し、自ら選択した探究課題に取り組むことで、主体的に学ぶ態度を育むとともに新たな人間関係を構築する力や他者の意見や考えを尊重する態度を養う。また、地域の人材等の多様な他者との交流を通して、コミュニケーション力を高めるとともに地域の一員としての自覚をもち、地域社会に積極的に参画する態度を養う。

(2) この学習を通して身に付けさせたい資質・能力（文部科学省「第三次とりまとめ」から）

- ①自己についての肯定的態度（価値的・態度的側面）
- ②自他の価値を尊重しようとする意欲や態度（価値的・態度的側面）
- ③能動的な傾聴、適切な自己表現等を可能とするコミュニケーション技能（技能的側面）
- ④他の人と対等で豊かな関係を築くことのできる社会的技能（技能的側面）

(3) 実践

実践Ⅰ 異学年集団による総合的な学習の時間「トライタイム」

① 実践の経過

(ア) 研究企画書の作成

研究テーマや研究方法をグループ内で検討し合意形成を図りながら企画書をまとめた。異学年集団にすることで、新たな人間関係を築くとともに様々なアイデアが出され、考えを広げることができた。



(イ) 専門家による講話や現地調査、事業所訪問、体験学習

研究企画書に基づき、実際に現地での調査活動や地域や専門家の方の聞き取り等を行う中で、人との関わり方やコミュニケーションの大切さを学ぶことができた。また一人一人に活躍の場を与えることで達成感を味わわせることができた。



(ウ) トライタイムセッション

各コース各班での調査、考察の結果を基に、よりよい西海市にするための提言などをまとめ、「大っ中学習発表会」で発表した。上級生が下級生に資料の作成の仕方を教えたり、発表原稿を一緒に考えたりするなど協力して準備を行った。当日は、一人一人に役割をもたせるなどして全員に活躍の場を設定し、学んだことを伝え、会場の方々との意見交換を通して、自分たちの考えを広げ深めるとともに、実践的なコミュニケーション技能を学び、身に付けた。



令和7年度の発表会には、時和特別支援学校西彼杵分校の生徒も参加し、意見を述べた。

(エ) パネルディスカッション「西海市未来創造プロジェクト よりよい西海市にするために今私たちにできること」

トライセッション後、深まった考えを基に各コース・各班で提言をまとめて、パネルディスカッションを行った。生徒一人一人が既習の知識や表現方法を生かしながら学習し、全校生徒で考えを深めるとともに、表現する力を高めた。



実践2 異学年集団および時和特別支援学校西彼杵分校と合同の体育的行事

本校では、体育大会において、縦割りの組分けを行い、上級生が下級生に集団演技などの指導を行う取組を続けている。事後の振り返りでは、上級生と下級生の間において感謝の言葉が述べられ、集団として互いを認め合う様子がうかがえた。今年度から、本校1階に時和特別支援学校西彼杵分校が開校し、小中学部との合同開催となった。合同練習から本番まで互いに励まし合い競技の際には応援したり支援したりする姿も見られ、ともに過ごす仲間としての意識を高めるとともに互いを認め合うきっかけとなった。



3 環境づくり班の実践

生徒の自己肯定感を高め、自己有用感や居場所を感じる掲示教育と人権に関する知的理解を深める環境づくりを中心に取組を実践した。

(1) 生徒が自分の学びや成長を感じ、自己肯定感を高める掲示教育

○ R6「大っ中の木」から R7「大っ中ときわの森」へ

“育てよう心の芽、育てよう大っ中の木”のキャッチコピーのもと、学校行事ごとに振り返りを行い、生徒が頑張ったことや先輩や後輩への感謝のメッセージなどを書き、生徒の成長が可視化できる掲示物を作成している。

今年度からは時和特別支援学校西彼杵分校との合同学校行事終了後に、振り返りを書き、掲示物を共同製作し、お互いに読み合うことで心の交流を図った。



令和7年度より時和特別支援学校も参加

(2) 人権意識の向上や知的理解を深める取組

○ 「人権に関する図書コーナー」や「人権・平和標語カレンダー」の作成

図書特別委員と人権に関する書籍を選書し、2階渡り廊下の人権に関する本のコーナーを設けた。また、平和や人権に関する学習後に、生徒一人一人に標語を作成させ、カレンダーにまとめることで、日常的に人権に関する言葉等に触れることができるようにした。



Ⅲ 研究の成果と課題

(1) QU テストの経年変化

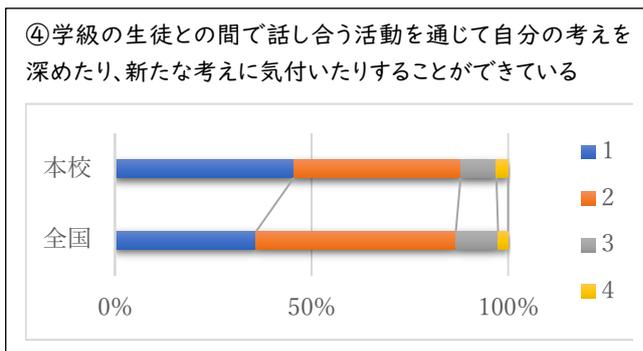
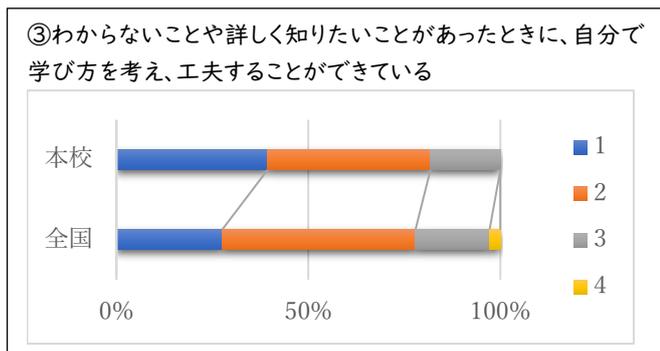
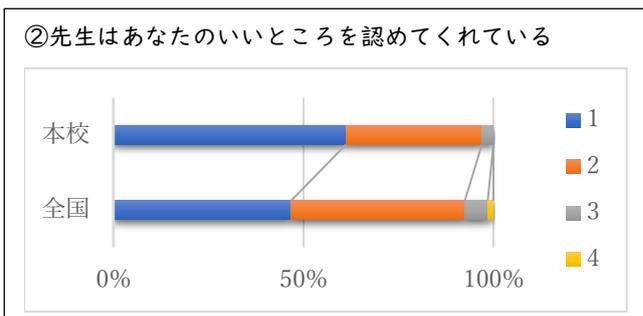
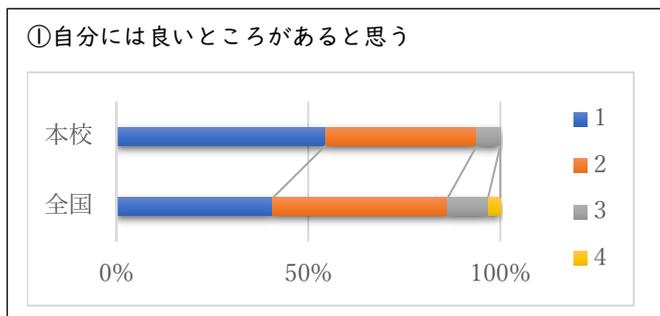
学級の状態【学級生活満足群の割合】(市平均) ※R7全国平均41%

	1年生	2年生	3年生
R7.6	61.5% (48.6%)	75.7% ↑ (45.3%)	61.3% ↑ (57.2%)
R6.6		72.5%	52.0%

本校の学級満足群の割合は、西海市の平均、全国平均と比較しても高く、学級の状態は安定している。生徒たちの親和性も高く、学級の生徒たちは対等な関係を築くことができている。

(2) 全国学力・学習状況調査質問紙調査の結果(現3年生)

1 あてはまる 2 どちらかといえばあてはまる 3 どちらかといえばあてはまらない 4 あてはまらない



(3) 成果

- ・自己肯定感を高めるための取組を通して、自分に自信をもつ生徒が増えるとともに、目標を掲げ、前向きに学校生活を送るようになってきた。
- ・異学年集団での学習や活動、対話活動を取り入れた学習を通して「他者の考えを聞く態度」が高まるとともに「他者の考えを認める」ことが自然にできるようになってきており、頑張った生徒に対して、自然に拍手を送るなど親和的な雰囲気が醸成されている。
- ・時和特別支援学校西彼杵分校との交流を通して、多様な個性を認め、共に生きる仲間として学校生活を送ろうと気持ちが芽生え、日常の中でも交流が生まれている。
- ・教師が「人権が尊重される授業づくりの視点」を意識することで、授業の中で発言しやすい雰囲気をつくることを心がけるようになった。また、「学びに参加している実感」を生徒にもたせるため、「一人一人が活躍できる場面」を設定し、「みんなの前で発言できない生徒への支援」を実践することで、全員が学びに参加できるようになってきた。

(4) 課題

- ・学級、学校は親和的な雰囲気が醸成され、生徒は安心して学校生活を送っているが、気になる言動は時折見られる。仲間が間違った行動をしていても、指摘することに躊躇する場面がある。生徒同士の自浄力の向上が望まれる。自分たちで課題と感じたことを解決していくために必要な力を身に付けさせたい。
- ・異学年集団による総合的な学習の時間は、生徒が自分でコース選択をすることで主体的に学ぶ意欲を高めることには有効であったが、持続可能な活動とするために内容を精選し、時間割や訪問先との調整を検討していく必要がある。
- ・本校生徒と時和特別支援学校西彼杵分校の児童生徒との学校生活は、円滑にスタートすることができた。今後は、時和特別支援学校の児童生徒と継続的に交流を促す仕組みをつくっていく必要がある。